

盾の勇者の成り上がり～黒龍騎士と紅龍の戦姫

ドラゴニール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どこかの世界、

世界を闇で包もうとする魔王と、それを阻止しようとする伝説の戦士たちがいた。

戦士たちの名は（プリキュア）（仮面ライダー）、そして魔王はその者達を倒そうと、闇の戦士を送った。

その名は（ダークライダー）、、、、。

彼はその戦士たちを倒そうと彼らに近づくが、彼らと共にいるうちに優しさ、心の温かさを知る。

そして彼は（仮面ライダー）となり（プリキュア）と（仮面ライダー）と共に魔王を倒し、愛する者と一緒にこの世を去った。

はずだった

目覚めると二人は異世界にいた。

そして盾の勇者達と共に世界の脅威『波』に立ち向かう!!!

はたして『波』を打ち払うことが出来るのか?!

この腐った世界を守るに値するののか?!

それでも、彼らは戦う、

そこで出会った仲間のために、

愛する者のために、

『変身!!』

目次

プロローグ：黒龍騎士と紅龍の戦姫

1

第一話《勇者召喚》

12

プロローグ：黒龍騎士と紅龍の戦姫

(どこかの世界)

「フハハハハハハ!!この程度か!貴様らの力は!!!」

そう言っている魔王らしき者の前には四人の少女と三人の少年が倒れていた。

「伝説の戦士など口ほどにも無い!!!」

「くっ、、、!!」

「っ、強い!」

「いや、強すぎ、、、!」

「このままじゃ、、、」

「こつちがやられちやう、、、」

「も、、、もう、、、」

誰もがあきらめかけていた、だが

「あ、、、あきらめない、、、」

そう言つて赤い鎧とドレスが混ざつたような服を着た少女が立ち上がる。

「龍騎、、、」

「龍騎、、、」

「絶対に、、、私たちがプリキュアだからとか、仮面ライダーだからだとか、関係ない、、、でも、、、」

そう言つて龍騎は涙を流す。

「龍騎、、、」

「リュウちゃん、、、」

「澪ちゃん」

「ミオつち、、、」

「でも、、、!もう誰にもあんな思いさせたくない、、、!だから、もうあきらめない!!負けない!!!」

「ほう、、、ならば貴様から始末してくれるわ!!」

と言い魔王は黒い斬撃を飛ばす

「くっ、、、」

龍騎は避けようとするが身体が動かない

「イヤー!!」

「やめろー!!」

「クソー!!」

「だめー!!」

「くそがー!!」

「濡ちやーん!!!」

誰もが叫ぶが黒い刃は龍騎に向かう、龍騎も命中すると思い目を
つぶる

龍騎「っ、!!」

だがその時

〈(G U A R D V E N T)〉〈(ガキイイイン!!!)〉

不思議な機械音と共に誰かが斬撃を受け止めた

龍騎「、?、、、!」

龍騎が目を開けるとそこにいたのは、、、

「え?!」

「な!」

「うえ!」

「、っ?!」

「い?!」

「な、なんで」

龍騎を含めた全員がそいつの姿を見て驚く

全身を光をも通さないほどの漆黒の鎧、龍を象った様な仮面の奥に
怪しく灯る紅い眼光、目の形はつり上がっており

左腕に装着された龍の頭部を模したガンレット型の召喚機「暗黒龍
召機甲ブラックドラグバイザー」、腰に巻かれたベルト「Vバックル
」そしてそこに描かれた禍々しい龍の紋章、今ここにいる誰もが、彼
の名を知っている、彼の姿を知っている、忘れるはずもない、過去に
何度も自分たちに挑戦してきた黒い騎士を、、、、

そう、、、彼の名は、、、

「「「リュウガ?!」」」

龍騎「レイジ、、」

リュウガ「だとしても!!!」

リュウガの声が鳴り響く。

リュウガ「たとえ、償いきれないほどの、許されない罪を背負って
も!たとえ、最後は一人で無様に死んだ^{散った}としても!!この命ある限り、
命を懸けて罪を償い続ける!!」

龍騎「レイジ、」

リュウガ「いつまでつたたり寝たりしてんだ!!漣!アキラ!薫!
雅人!玲奈!誠司!美華!お前達の隣には、仲間がいるだろう!!守り
たいモノがあるだろう!!だったら立ち上がって勝って見せろ!!!」
すると

アキラ「ふっ、んな事わかつとるわ!!」

薫「フフツ、まさか彼に励まされるとわね。」

雅人「でも、リュウガ、お前の言ってること一つ間違えがある
ぜ、、」

リュウガ「なに、?!」

玲奈「それは、アンタも仲間だつてこと!」

リュウガ「俺が?」

美華「そつ!アタシたちの言う仲間には!」

誠司「お前も入ってるつて事だ。」

漣「だから、一緒に行こう?リュウガ、ううん、レイジ。」

そう言つて漣が手を差し伸べる。

リュウガ「漣、アキラ、薫、雅人、玲奈、誠司、美華、お前ら、、、つ
!、、ああ!」

と言いリュウガはその手を掴む。

「キイイイイイイイサアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アア!!!なにものだあああああああ!!!」

アキラ「おっと、言つてなかったか? (ドードー!!)」

雅人「俺ら、いや、俺たちは生きとし生ける命をつなげる、、

(ジョーカー!!)」

誠司「戦士だ!! (スタートユアエンジン)」

薫「いくよ！みんな!!」

「「「「「おう！（ああ！）（うん！）（ええ！）」」」」」

「「チェンジ!!プリキュア!!」「「変身!!（オーソライズ、、、）（♪）（ドラァイブ！タァイブ！スピード!!♪」」

キュアエグゼイド（薫）「心を癒す恵みの光、キュアエグゼイド!!」

キュアドレイク（玲奈）「全てを撃ち抜く閃光の狙撃手、キュアドレイク!!」

キュアゴースト（美華）「魂を導く光の使者、キュアゴースト!!」

キュア龍騎（滯）「燃え滾る深紅の戦姫、キュア龍騎!!」

「「ヴァルキュレイドプリキュア!!!」」

アキラ達もそれぞれの仮面ライダーに変身する（アキラ||仮面ライ

ダー雷、雅人||仮面ライダージョーカーへフアングバージョン、誠司

||仮面ライダーゼロドライブ）

雷（アキラ）「ハー、お前を倒せんのは、、、俺たちだ!!」

ジョーカー（雅人）「さあ、お前の罪を数えろ！」

ゼロドライブ（誠司）「ひとつ走り付き合えよ!!」

リュウガ（レイジ）「俺は、もう闇の鬼神では無い、、、仮面ライダー

だ!!!」

リュウガは、、、いや、レイジは覚醒した、、、そう、、、絶望の切り裂く漆

黒の騎士、、、仮面ライダーとして。

魔王「おおおおおのれ!!!プリキュア!!仮面ライダー!!!」

-----!!!

雷「ウウウオオオオオ!!!これで終わりだああ!!!」

煉

雷 剛

獄

ゼツメツ

デイストピア

ジョーカー「これで、決めるぜ、（ジョーカー！マキシマムドライブ）ライダーキック、！！」

ゼロドライブ「行くぞ!!!（ヒッサーツ、フルスロット!!!）」

リュウガ（ファイナルベント）はあああああ、！！」

キュアエグゼイド「切り開く運命！」

キュアドレイク「全てを撃ち抜く閃光！」

キュアゴースト「命の輝き！」

キュア龍騎「燃え滾る勇氣！」

「「「ファイナルヴァルキュリームスクリュー!!!」」」

それぞれの必殺技が魔王に命中する。

魔王「ぐおおおおおおおおお!!!」

すると魔王の身体から、光が発され全員が、その光に包まれる、

目を開けると八人は白い空間にいた。

雷「どこだ？ここ。」

ジョーカー「さあ、」

キュアゴースト「あ！あそこ！」

キュアゴーストが指差す所を見ると

？「ぐすつ、ぐすつ、ひっく、、、」

一人の子供が泣いていた

？「消えたくない、忘れないで、、一人ぼっち、やだよ、、」

キュアドレイク「まさか、あれが!？」

キュアエグゼイド「魔王?」

「「「ええ!!!」」」

ゼロドライブ「そうか、分かったぞ、魔王の正体、」

キュア龍騎「ええ、、あれは、忘れ去られた者達、、」

キュアゴースト「どうゆこと?」

リュウガ「多分あれは、大昔に忘れられた者達の『忘れられたくない』

『消えたくない』と言った感情が魔王を生んだんだろう」

キュアエグゼイド「、、、、、、」

キュアエグゼイドは魔王の方に歩き出す。

キュアゴースト「ちよっ、エグゼイド!」

キュアドレイク「待ってゴースト!」

魔王「グズツ、、お姉ちゃんは?」

キュアエグゼイド「、、、、、、(ギユッ)」

キュアエグゼイドは魔王をやさしく抱きしめる。

キュアゴースト「えっ、」

雷「なっ、」

その行為に全員が驚く。

キュアエグゼイド「寂しいよね、一人ぼっちって、でも大丈夫、ここに誰もがあなたを覚えてる。だから大丈夫、」

魔王「ほんと?ほんとに忘れたりしない?」

キュアエグゼイド「うん、約束する、絶対忘れない。」

雷「けっ!忘れてもわすれつかよ!!」

キュアゴースト「そうそう!」

ジョーカー「まったく」

キュアドレイク「ええ、」

ゼロドライブ「こんなキョーレッツな奴」

キュア龍騎「ええ」

リュウガ「ああ」

キュアエグゼイド「雷、、みんな、、」

すると魔王が光に包まれる

キュアエグゼイド「え?!魔王!」

魔王「ありがとう、みんな、、、そう言ってくれて、、、また会えるかな?」

キュアエグゼイド「うん!きっと会える!!その時は友達になろう!!」

絶対!!生まれ変わっても!また、会えるよ!!きつと!!」

一同「ええ!うん!ああ!おう!」

リュウガ「魔王!!あの時、俺を拾ってくれて!育ててくれて!あり

がとう!!!マオ、いや!父さん!!!」

キュア龍騎「リュウガ、、、」

魔王「ありがとう、、、みんな、ありがとう、、、プリキュア、仮面ライダー、、、」

そう言つて魔王は光となり消えていった。

すると全員が戦っていた場所に戻る、

魔王「余が光に満たされていく、、、」

と言いつちらの魔王も消えた。

雷「勝つたのか?俺ら、、、」

キュアエグゼイド「ええ!」

雷「やった、、、やったぞおオオオオ!!!」

キュアゴースト「やったああああ!!!」

ジョーカー、ゼロドライブ「はあ!」

キュアドレイク「ふふっ」

全員が歓喜の声を上げる。

すると

リュウガ「ははっ、(ドサツ)」

リュウガの変身が解除され、倒れる。

キュア龍騎「レイジ!」

キュア龍騎はレイジを抱き起す

一同「?!」

一同も驚きリュウガ、いや、レイジの元に戻る

するとレイジの身体が光になっていく

雷「、、、っ!!なんでだよ、、、!」

キュアエグゼイド「レイジ君、、、!」

レイジ「ははっ、無理しすぎたみたいだ、、、」

キュアゴースト「レイジっち、、、」

ジョーカー「くそっ!!!」

キュアドレイク「うそでしょ、、、?」

ゼロドライブ「そんな有りかよっ!!!」

キュア龍騎「、、、」

レイジ「たーくつそんな顔するな、みんな、」
全員が悲しみ泣いていた。

すると、レイジが口を開ける

レイジ「おい、薫、お前、保育士になりたいっていてたな、」「えっ」
大丈夫お前ならなれる、」

キュアエグゼイド「ヒッグ、うん、頑張る、！」

レイジ「玲奈、、、お前、頭いいし運動神経もいいけど、もうちょい素直になれよ。」

キュアドレイク「余計なお世話よっ、ウウツ」

レイジ「ははっ、美華、、、歌やダンスも没頭するのもいいけど、勉強はちゃんとしろよな、」

キュアゴースト「こんな時に、それ言う？普通？」

レイジ「ははっ、んでアキラ、薫の事好きなら好きって、早告れや、」
雷「なっ！なんでお前、それ知ってたんだ?！」

レイジ「見てたらわかるわ、んなもん、、、んで雅人、誠司、お前ら探偵と刑事やるって言ってたよな？お前らの推理ならやれる！あと誠司、玲奈と付き合ってるなら守ってやれよ、」

誠司「ああ、！」

レイジ「雅人、美香を支えてやってくれ、」

雅人「ああ、分かってるわ、そんな事」

レイジ「フツ、、、そして漣、オレな（ギョッ）お?！」

キュア龍騎はレイジを抱きしめる

するとキュア龍騎の変身が解け身体も光りだす。

キュアエグゼイド「え、？」

レイジ「おい、、、何してんだ、、、漣、、、早く離れろ、、、このままじゃ、お前まで、、、」

漣「ねえ、レイジ、、私もついて行ってもいい?」

キュアドレイク「え、」

キュアゴースト「うえ?」

レイジ「だめだ、、、お前の素晴らしい人生は今からはじまるんだろ、、、？」

とレイジは目を見ていうが、

レイジ「、ハア、、と言つても着いてくるんだろ？」

漣「ええ、だつてあなたの事一人にできないんだもん。」
するとレイジはキュア龍騎を抱きしめかえす。

レイジ「勝手にしろ、、バーカ、、」

漣「ええ、そうさせてもらうわ。」

雷「漣、、」

キュアエグゼイド「漣ちゃん、、」

漣「薫、アキラ君、玲奈、雅人君、美華、誠司君、悲しまないで、きつとまた会えるから、、」

キュアエグゼイド「うん！」

雷「ああ、」

キュアドレイク「ええ、きつと。」

ゼロドライブ「おう、、。」

キュアゴースト「そうだよ！また、いつかの明日で！」

ジョーカー「ああ、そうだな、。」

漣「フフツ、さあ、レイジ行きましよ。」

レイジ「ああ、お前ら！達者でな!!」

そう言つてレイジと漣は光となつて消えていった。

こうして、漆黒の龍騎士と深紅の戦姫の幕は閉じた、、、、

はずだった、、、、、

「おお!!成功したぞ!!」

レイジ「んああ？」
濤「ええ？」

う
う
く

第一話 《勇者召喚》

『おお!!成功したぞ!!』

レイジ「んああ?」

漣「ええ?」

レイジ達が目を覚ますと、何処かの建物の中の魔法陣の上にいた。

漣「レイジ、、、」

レイジ「漣!」(ギュッ)

レイジと漣はお互いの無事を確かめ合い、レイジは漣を抱きしめる。

レイジ「よかった、、、」

漣「レイジ、、、でも私たち、、、」

レイジ「ああ、、、」

消えたはずの自分達が生きていた事に驚いていると、

「どーなってるんだ?これ?」

声がしたので後ろを見てみると、そこには、髪がぼさつとした男、黒髪の少年、薄い緑色の髪の少年、金髪でロングポニーテールの男が立っていた。

漣「ねえ、レイジ、」

レイジ「ああ、、、(なんで四人とも武器持ってた?)」

髪がボサツとした男は盾、黒髪の少年は剣、薄緑の少年は弓、金髪ポニーテールは槍を持っていた。

「おおっ古の四聖勇者様っ、どうかこの世界をお救いください!!」

「「「(えっ?)は?」「」」」

レイジ「どういうことだ?」

「色々と込み合った事情があります故、ご理解する言い方ですと、勇者様達を太古の儀式で召喚させていただきました。」

レイジ「ほう、、、」

「この世界は今、存亡の危機に陥っているのです。勇者様方、どうかお力をお貸してください」

ローブの男は深々とレイジ達に頭を下げる。

「まあ、話だけなら、」

「嫌だな」

「そうですね」

「元の世界に帰れるんだよな？話はそれからだ」

レイジ「おいおい、話聞けや、お前ら。んでさ此処の軍隊とかで対処できなかったのか？まあ、できなかったからだろうけど、」

ローブの男「はあ、第一波は国の騎士と冒険者で退けましたが〈竜刻の砂時計〉が既に次の厄災の波の時を、」

「人の同意もなく突然呼び出したことに罪悪感はないのか？」

黒髪の少年はローブの男に持っていた剣を向けた

「仮に、世界が平和な鳴つたらすぐに元の世界に戻されてはタダ働きですしね」

「こっちの意向をどれだけ汲み取ってくれるんだ？話によっちゃ俺達が世界の敵になるかもしれないから覚悟しておけよ」

レイジ「おい、人の話は最後まで聞けよ、まあ、報酬は？」

ローブの男「は、はい、まずは王様と謁見していただき、報酬の相談や、その他諸々の重大な話はその場をお願いします。」

レイジ「よし、連れてけ」

ローブの男「は、はい」

漣「ちよつとレイジ！」

レイジ「大丈夫だ、イケスカン奴ならその場で潰す。」

漣「そう言う問題じゃなくて」

「二二」なんかコイツヤバイ、」

ローブの男が道を示したため、それについていく。(レイジは、念のため変身準備)

暗い部屋を抜け石造りの廊下を歩く、そして窓の外を見ると中世期ヨーロッパのような街並みが広がっていた。

「すげえ、」「おお、」「すごい、」

髪がぼさつとした男とレイジ、漣の声が重なる。

そうして、歩いていると彼らは謁見の間にたどり着いた。

「ほう、こ奴等が古の四聖勇者か。しかし、6人いるぞ？わしの記憶違
いだらうか？」

レイジ「なんか腹立つな」

漣「ちよつとレイジ！」

「面を上げい！」

レイジ「別に誰も下げちやいねえよ」

「！！！！」

うわあ〜こいつ言っちゃったよ、と言う茎がその場に流れる。

「んっん！ワシがこの国の王オルトクレイメルロマルク32世
だ」

レイジ「へえ〜」

王「さて、まずは事情を説明せねばなるまい。この国、さらにはこ
の世界は滅びへと向かいつつある。」

レイジ「終末の予言と、次元の亀裂ねえ〜、へえ〜」

漣「簡単に言えば、この世界は滅亡の危機に瀕していて、私たちが
持つてる、『伝説の武器』でその危機を救ってほしい、ってことね。」

レイジ「んで言葉が分かんのもそれのおかげか。」

王「うむ、そういうことじゃ。」

「話は分かった。つまり勝手に召喚した召喚された俺たちにタダ働き
しろって事だな。」

「都合のいい話ですね。」

「そうだな、自分勝手としか言いようが無い。滅ぶのなら勝手に滅べ
ばいい。俺たちにとってどうでもいい話だ。」

漣「ちよつと、あなた達」

と漣が言おうとした途端レイジが割って入る。

レイジ「おいおいおい、お前らさっきローブの男が言ってた事忘れ
たか？おい、もちろんタダでは言わねえよな？」

王「安心せい、もちろんある。」

と言うと、王は近くの大臣な目線を送る。

「はい、もちろん、勇者様達には存分な報酬は与えられる予定です。」
それを聞いた、レイジ、濬以外の4人は小さくガッツポーズをした。
レイジと濬は、やれやれといった顔をしている。

「他に援助金も用意できております。ぜひ、勇者様達には世界を守っていただきたく、そのための環境も整える所存でございます。」

王「では勇者達よ、名前を聞こう。」

「俺の名前は、天木錬。年齢は16歳、高校生だ。」

黒髪の少年は《剣の勇者》、天木錬。

切れ長の目に白い肌でなんかクールっぽい奴。

「じゃあ、次は俺だな。俺の名前は北村元康、年齢は21歳、大学生だ。」

金髪ポニーテールは《槍の勇者》、北村元康。

背が高くなんかチャラそう。

「次は僕ですね。僕の名前は川澄樹。年齢は17歳、高校生です。」

薄緑の髪は《弓の勇者》、川澄樹。

小柄で穏やかそうだ。

王「ふむ、レンにモトヤスにイツキか、「おい、老いぼれ、」なっ！」

自分たちを無視した王にレイジが物申す。

元康「おい、それはまずいって」

樹「そうですよ。」

錬「わざとらしく、無視した王も非はあるが、」

レイジ「俺の所では見えてんのに人数を間違える奴を、バカかアホか老いぼれ、もしくは、相当間抜けな奴と言う。」

濬「ちよつと、レイジ」

王「きつ、貴様」

レイジ「なんだよ、人無視しといて逆ギレか？子供でも間違えねえよ、後この世界がどうたら言うんだつたらそこん所、ちゃんとやれつて話だ。」

王「ぐっ、、、」

王はレイジの言うことに言い返せない。

レイジ「自己紹介だったな、じゃっどうぞ。」

「えっ、あつああ、俺の名前は岩谷尚文。年齢は20歳、大学生だ。」
ぼさつとした髪の奴は《盾の勇者》、岩谷尚文。
穏やかな雰囲気であつとオタクぽい。

レイジ「俺の名は鬼灯レイジ。年は15、中学生だ」

漣「私は神威漣。年は16歳、高校生よ」

王「では皆、己がステータスを確認し、自らを客観視してもらおう」

「「はっ。」」

樹「えつと、どのようなして見るのでしょうか？」

鍊「なんだお前ら、この世界に来てすぐ気付か無かったのか？」

樹が王に聞くと鍊が呆れたように言う。

鍊「視界の端にアイコンが無いか？」

「「えっ。」」

そう言われ意識を、ぼんやりすると視界の端マークが見える

鍊「それに意識を集中させてみる。」

集中するとデータの様なアイコンが表示される。

『鬼灯レイジ』

職業：黒龍騎士（仮面ライダー）（勇者） Lv. X

装備：仮面ライダーリュウガ

スキル：仮面ライダーリュウガ及び他のミラーライダーに変身可能

魔法：ERROR

』

レイジ「（レベルX？）」

漣「レイジ、」

レイジ「漣、お前はどく書いてた？」

漣「紅龍の戦姫（プリキュア）（勇者） って」

レイジ「レベルは？」

漣「Xって」

レイジ「お前もか？」

漣「レイジも？」

レイジ「ああ」

樹「レベル1ですか、、、これは不安ですね。」

元康「そうだな、これじゃまともに戦えるかもわからねえ。」

レイジ「どうやら俺ら2人以外は全員レベル1みたいだな。」

漣「ええ、そうみたいね、、、」

その後、魔法が、どの、この、言っていたがレイジは適当に聞き流しながら、これからどうするか考え、漣は話を聞いている。

そして武器を、強化するために冒険の旅に出なければならぬことを告げられる。

それを聞いたレイジと漣を除いた勇者達は己らの武器に夢中になった。

多分、異世界召喚と未知の魔法と言う、魅惑のテイストのシチュエーションに興奮してるからだろう、それを見た2人はどこからか不安を覚える。

すると、やはりパーティーをどうするかと言う話なる。

「俺達6人でパーティー組むのか？」

と誰が勇者は、誰が前衛で後衛するのか相談し冒険の旅に出ようとしている。

すると、大臣が口を開く。

「お待ちください勇者様方」

レイジ「なんだ？」

「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出ることになります。」

樹「それは何故ですか？分散せずにみんなで戦えば良いのではないのですか？」

「はい、伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持っておりまして、勇者様達だけで行動すると成長を阻害すると記録されております」

そう言われ皆、己の武器のヘルプを見る。

『注意：伝説の武器同士を所持した者同士で共闘した場合、反作用が発生します。』

「マジか、、、」

一方、レイジと滯は、

『ただし、黒龍と紅龍、この伝説の武器は例外で反作用は起こりません。』

レイジと滯はお互いにだけこのことを知らせあう。

元康「となると仲間を募集した方がいいのか？」

と元康が言うと

王「ワシが仲間を用意しておくとしよう。何分、今日は日も傾いておる。勇者殿、今日はゆつくりと休み、明日旅立つのがよいであろう。明日まで仲間になる逸材を集めておく、別々とはいえ波の時は肩を並べて戦うのじゃ、この間に交流しておくときいぞ。」

「ありがとうございます」

そして皆、王の用意した来賓室で休むことになった。

— 来賓室 —

来賓室に着くと4人は（レイジと滯以外）はゲームやら総理大臣の名前やら、話している。

レイジ「ってことは俺らは違う世界の違う日本から来たって事か。」

レイジが口を開きそう言うと4人は反応する

レイジ「となると、お前ら、どうやってここに来たんだ？ちなみな

俺は死んだはずだったんだが、」

鍊「おれもだ。」

元康「俺もだな」

樹「僕もです。」

レイジ「ってことは尚文は違うのか？」

尚文「あ、ああ」

レイジ「んじゃあ1人づつ言おう。」

鍊「俺は学校の下校中に、巷を騒がす殺人事件に運悪く遭遇してな？」

レイジ「ふくん」

鍊「一緒にいた幼馴染を助けて、犯人を取り押さえてたところまで覚えているんだが、、、」

と言い脇腹を擦る。

レイジ「うん、100%刺されたな。御愁傷さん。」

元康「じゃあ次は、おれだな。」

と言い、次は元康が自分に指をさす。

元康「俺さ、ガールフレンドが多いんだよね。』

「『、、、』『』」

元康「それでちよーつと、、、」

レイジ「よし、、、元康だったけ？俺当てるわ。どーせ、コソコソ女に手え出して殺されたんだろ？多分、、、」

元康「えっ？なんで分かったんだよ。」

レイジ「はあく、良いか？女に手え出すって事はそいつの人生に責任持つって事だ、複数いるならそいつらの人生に平等に愛を注ぐ覚悟をしろ、それが男だ。」

元康「うぐっ、」

樹「次は僕ですね。塾帰り名横断歩道を渡ってたら、、、突然ダンブカーが全力で曲がってきまして、その後は、、、」

レイジ「轢かれたな。」

樹「はい、、、」

漣「何か、何処かの本で読んだような、」

尚文「なあ、この世界に来た時の話って絶対に離さなきゃ駄目か？」

元康「そりやみんな話してるし。」

尚文「そうだよな。悪い、俺は図書館でふいに見覚えのない本を読んでいる気が付いたらって感じた。」

「『、、、』『』」

すると3人はレイジ、漣、尚文に聞こえないように話し出す。

樹「でも、あの人盾だし、」

元康「やっぱ、、、とこころもっ。」

鍊「ああ、」

元康「あの2人ってどうなんだろう？」

と言いいレイジ、漣を見る

レイジ「ああ、俺か、俺な、、元々世界を闇に包もうとしてる魔王の直属の部下だったんだよ、、」

「「はあ?」」

3人が腑抜けた声を出す

漣「ちよつと、レイジ!」

レイジ「良いんだよ、どうせ嘘着いてもバレるし、俺元々孤児でな、施設で虐められて脱走したんだよ、そこで魔王に拾われてな、鍛えられて戦士になった。まあ、師匠でもあり親みたいなものかな? んで漣、お前の事も言っちゃまっていいか?」

漣「はあ、良いわよ別に、」

レイジ「はは、サンキューんで漣はその魔王から世界を守る伝説の戦士の1人だ。」

「「?!」」

漣を見て驚愕する3人

レイジ「まあ最初はスパイとして入って戦かってたんだが、そいつらといる内になんか、、ナ?んで、正体ばれちゃまったんだが、漣や俺は俺を過去を知って許して温かく包み込んでくれた、んで最後は魔王裏切つてな皆で倒したんだけど俺は無理しすぎた反動で死んでな、漣はそんな俺に死ぬ間際は抱きしめて付いてきてくれた、まったく、、正直言つて、、嬉しかったよ、、」

漣「最後は私ね、つて言つても死因はレイジが言ってくれたから言わなくていいわね?」

「「、、、、、、」」

レイジ「さつ! 沁みつたれた話はここまでにして! ん?(スンスン) なんかいいい匂いすんな!」

「勇者様、お食事の用意が出来ました。」

レイジ「おつ! んじゃ行くか!」

と言いいレイジ達は食事を取り寝床に着き寝る、、レイジ以外は、、レイジは、ベットに入ると、、

レイジ「おい、いるか? ドラゴブラッカー。」

「キイイイイイイイイイイン」

ドラゴブラツカー「グオオオオオオオオオオオ」

ガラスに黒龍《暗黒龍ドラゴブラツカー》が映る

レイジ「お前以外もいるか？」

「キイイイイイイイイイン」

「グオオオオオオオオ」

「キイイイイイイイ」

「シャアアアアアアア」

「キシヤアアアアア」

と言う鳴き声と共に

ガラスには、蛇や蝙蝠、虎や蟹、犀の様なミラーモンスターが映る。

レイジ「よし、、、みんないるな。、ボルキャンサー、エビダイバー、メタルガラス、ベススネーカー、デスワイルダー、バイオグリーザ、お前らはこの城に何があつてどうなつてんのか見てくれ、特にあの王とか言ういけすかん奴は要注意人物だ。後ダークウイング、ギガゼール、ブランウイング、ゴルドフェニックス、アビスラツシャーにサイコログ、お前らはこの国がどう言った所見てくれ。そして、ドラゴブラツカー、ドラグレッツダー、マグナギガ、ガルドサンダーお前らは寝ている滞の護衛を頼む。いいな？」

「グオオオオオオオオオオ」

「グオオオオオオオオ」

「キイイイイイイイ」

「シャアアアアアアア」

「キシヤアアアアア」

と言いミラーモンスター達は各々行く。

レイジ「さて、、、寝るか。」

と言いレイジも眠りに着く。

次の日の冒険で何があるか、、、まだ誰も知らない、、、、。

続く

（ED（不老不死））